



[講演]

正規学部留学生受け入れ の新時代 ーダイバーシティ⇒インクルージョン、 コラボレーションへー

国際化推進機構長
異文化コミュニケーション学部 教授
池田 伸子 氏

○藤田 次に、池田伸子先生にご講演いただきます。ご講演のタイトルは、「正規学部留学生受け入れへの新時代、ダイバーシティからインクルージョン、コラボレーションへ」です。池田先生のご講演は配布資料がございませんので、画面をご覧くださいと思います。

では、池田先生、よろしくお願いいたします。

○池田 ご紹介ありがとうございました。立教大学の池田と申します。3人の先生方、ミビン先生、ルッシー先生、それからトゴス先生、それぞれの国の中で、日本という国を明確に意識していただきながら、大変優秀な外国語力、日本語力、英語力も含めて、基礎学力も含めて、大変優秀な生徒さんたちを育成していただいているということが非常によく伝わってまいりました。ここからは先生方からのバトンを受けるという形で、そんな先生たちが一生懸命、強い思いを持って育てていただいた生徒さんを、大学として、日本の大学として、立教大学として、どう受け取り、さらに育てていこうと思っているのかということについて、短い時間ではありますが、お話をさせていただきたいと思います。「正規学部留学生受け入れの新時代、ダイバーシティからインクルージョン、コラボレーションへ」というタイトルで、短い間ですけれどもお話をさせていただきたいと思います。【スライド④-1】

まず、今です。きょうのこのシンポジウムも、先生方、あるいは聞いてくださっている方々と空間を共有できないまま、Zoomという形での開催に至っています。これまで、21世紀、これからの社会は、世界の中で少子高齢化が進み、また格差が拡大し、そんな中でもグローバル化の流れが止まらない、そういう不

透明な状況だと言われてまいりました。そこに加えて、今、私たちはCOVID-19、新型コロナウイルス感染症の中にいます。そしてその影響によって、私たち自身、あるいは多くの学生自身も行動制限であったり、外出自粛であったり、友達と会えなかったり、これまでの日常生活が送れないという状況にあります。そんな中で、私たちは今、より一層先が見えない、あるいは前例が探せない、そして不安や不満といった中に置かれています。

そんな中で、私達は、より社会で、世界で求められる人材を育てていく必要性を感じています。具体的に言いますと、コロナの影響で、こうやって画面越しにしか人とのコミュニケーションができないという時代にあっては、これまで、特に日本の中では、ハイコンテクストの中で、全てを言葉で言わなくても何となく伝わるんじゃないか、あるいはその場の空気、雰囲気、相手の言うことを、相手が言いたがっていることがお互いに察し合えるんじゃないかという状況がございましたが、今、この時代は、ますます言語化をしていく力が求められているように感じています。

自分が何を思っているのか、どんなふう感じているのか、それを的確に言葉にして、さらに身振り手振り、あるいは顔の表情も含めて、その自分の意図を相手に伝えていく、そういう力が社会の中で求められているのを感じています。

また、行動が制限される、これまでできていたことができないという中で、そんな中でも自分なりに面白さ、興味・関心を見つけ出し、それを自分で追求していく、それによって自分を高めていく、そういう力が求められているように感じています。

また、不透明な状態ではありますけれども、自分の置かれている状況の中で、いろいろ適切に情報を集め、そこから未来を想像し、その未来に向かって一歩ずつでも前に進んでいける力、それが求められていると思います。そして、そういうことを達成していくためには、これまでの自分に縛られない、今までの自分を変えてみる、周りを少し変えてみる、その変わる、変えることを恐れない、そして前に進む、そういう力が求められているというふうに強く感じています。

そして、そんな中、日本の大学、立教大学の役割も変わってきていると感じています。これまでも、もちろんこのコロナの前の段階でも、21世紀は不透明な世紀だ、これから世界は、社会は、どんどん不透明で先が見えなくなってくると言われていました。そんな中で、インドネシアのルッシー先生のお話にもあった

ように、21世紀型のスキルであるとか、社会人基礎力のように、単に大学の中では、狭い専門知識、それを身につけることだけではなくて、画面にもありますようなソフトスキル、つまり4年間という年月を、教員、あるいは仲間たちと共に学ぶ中で、他者との協働やチームビルディング、そういうものを通して、自分自身を知り、自分自身を確立し、他者への理解力を培うといったような、他者とのコミュニケーションの中で必要とされるソフトスキル、それを大学の中で育成すべきだというような意見が多く聞かれるようになっていきます。私は今、このコロナの中であって、また3人の先生方のお話を聞いて、より一層、この大学の中でのソフトスキルを育成する重要性を感じています。【スライド④-2】

つまり21世紀の課題は、1つの国だけでは解決できないものなのです。SDGsという言葉が今、世界、さまざまな地域で、国内外で聞かれるようになりましたが、SDGsもこの考え方を共有しています。つまり1つの国だけで21世紀のこれからの社会的な課題は解決することができない。

ではどうするかというと、他者との協働から、これまで前例のなかった、つまり、何ていうのか、問題の解き方が用意されていない中で、自分たちなりの解を導き出していく必要性が高まっているということです。

立教大学では、この21世紀の課題、これに果敢に取り組んでいくことができる人材を育成することこそ、立教大学のミッションだというふうに強く捉え、21世紀を担う人材を国境を越えて育成する必要があると強く感じています。

21世紀の課題は、日本だけでは解決できません。日本以外のいろいろな地域の中で、21世紀を担う人材が活躍をしていく、それによってこそ、21世紀の課題は解決されると感じているからです。

そして、それを具体化するために、立教大学では「Rikkyo Global 24」、またTGU、トップグローバル大学創成事業という形で、新たなグローバルリーダーの育成に取り組んでいます。そこでは、ご覧いただいている3つの力、国境を越えて流動化する社会に柔軟に対応し、新しい仕組みを生み出していく「変革力」、豊かなコミュニケーション力で異なる文化、習慣を持つ人々とともに課題を解決する「共感・協働力」、地球規模の困難な課題に向き合い、問題の本質を理論的に解明する「思考力」、この3つの力を備えた21世紀を担う新たなグローバルリーダーを、立教大学での4年間を通して育成しようとしています。【スライド④-3】

つまり、世界中に立教の理念、先ほどお伝えした3つの力を持ち、立教大学の理念を共有したグローバルリーダーを広げていこう、そういう思いで今、私たちは教育に取り組んでいるということになります。

そこで、そうなるためには、立教大学はどうしなければいけないのか、どう変わらなければいけないのかということを考えてときに、私たちはまず現行の外国人入試について考え直しました。今、立教大学に入るためには非常に高い日本語能力が要求されています。結果として、台湾・香港を除く中国、それから韓国からの学生が学部で学ぶ留学生の9割以上を占めるということになっています。これでは世界中に、さまざまな地域に、立教大学の理念を共有した新しいグローバルリーダーを広めていくことができません。そこで立教大学では、まずは入り口、入試の方法を見直しました。そしてその次に、立教大学に入ってから学びのパス、道筋を捉え直しました。4月の入学にとらわれない9月入学、それから渡日しなくてもいい、あるいは、さっきも言いました日本留学試験に必ずしも頼らない国際標準の選抜、それを取り入れていく。

さらに日本語力に偏らない選抜。そうすることで、いろいろな地域や国から優秀な学生を立教大学の中に招き入れようというふうに思いました。さらに入ってからプログラムについても、必ずしも日本語で学位を取得するコースだけではなくて、英語で学位を取得できるプログラム、これを増やす。さらに日本語力を立教大学に入ってから強化をしていく、そういう道筋を持ったプログラムを作るということを考えています。そうすることで、さまざまな地域から、基礎学力が確かで、立教大学で学ぶ意識、大学で学ぶということの意識が非常に高い学生を立教大学の中にお招きしようということになりました。【スライド④-4】

立教大学では、そういう入試、それからプログラムの改革で、さらにさまざまな地域、それから国から、立教大学で学びたいという新たなグローバルリーダーの卵を迎え入れようとしています。そんなときに、4年間、どういうふうに学ばせていくことが立教大学として必要なのかを考えました。そこで、今ご覧いただいているような、ちょっと図で考えてみたいと思います。

これまで立教大学だけではなく、多くの大学は、今ご覧いただいているような形で留学生の受け入れを考えてきました。つまり、マルの中が日本の大学、立教大学だと思っていただいて構いません。海外から立教大学に入ろうと思うと、立教大学の教育制度、立教大学のさまざまな学事のシステム、それに適応する学生

だけを受け入れてきたということになります。そうすると、立教大学の中には留学生という形で存在はしますが、立教大学自身は何ら変わっていないということになります。つまり受け入れ母体の教育システムや受け入れ制度というのは何ら変化をしていないということになりますし、そこで学んでいる学生たちも、同じプログラムを履修していくということになるので、そこに何ら多様性というのがあまり見えてこないということになります。

また、それだとなかなか輪の中にいろいろな生徒さんを受け入れられないということで、外枠に留学生さんだけを入れる教育組織を作り、そこで、本体に入ることができる日本語の力、あるいは基礎学力等が身についたら本学に受け入れるというような形、これも模索されてきました。ご覧いただいているように、日本語力、あるいは基礎学力ともにそのレベルに達した場合には、その大学に入ってくるのですが、それ以外の場合には出ていってしまいます。

これについても、留学生のほうが日本の大学の日本語力であったり、あるいは入学時期であったり、そういうところに合わせていくということになりますので、受け入れる大学の中には何も変化は生まれないということになります。

次に、これが今度は点線で囲まれている輪の中に留学生たちが入っているという絵になりますが、この点線にしてある理由は、正規の学部留学生、正規の留学生ではないからです。つまり、半期や1年間という限られた短い時間だけ大学の中に存在していて、その人たちは、大学の中で履修できる科目、そのみを履修して、自分の国の大学に帰っていくという形になります。もちろんここで立教大学、あるいは日本の大学の中で学んでいる学生との交流というのは行われますが、半期、あるいは1年で、それぞれ学生は自分の国に帰ってしまいますので、4年間というような長期的な人間関係の中での学びというのは構築されにくいということになります。

また、積極的にこういう交流に活動する学生たちは、1年や半期という短い時間であっても交流の機会を得ますが、それ以外の学生にとっては接する機会が非常に少ないという状況です。また、ここでもやはり、受け入れている大学の教育カリキュラムでありますとか、いわゆる正規の入学時期とか、さまざまな教務的なシステム等々については変わらないということになります。つまり正規の学生として受け入れているわけではないですので、受け入れている大学の、いわゆる根っこに関わる部分というところについては変わる必要がない、そのまま受け

入れているという状態になります。

次に、立教大学、あるいは国際化に取り組んでいる大学では、今、多くはこういう状況なのではないかというふうに思っています。つまり学部、ある学部の中、あるいは大学の中に、一定の条件をクリアしている学生たち、そこは留学生であろうが日本人であろうと一緒にですが、その人たち用のプログラムを作る、あるいは学部を作る。その中では、例えば入学時期であったり、例えば教育言語であったり、さまざまな履修のシステムであったり、そういうところが、いわゆるメインストリームの学生さんたちとは違っているという状態です。つまり大学や学部の中に、ぽこっと、ちょっと他のメインの学生さんたちとは違う仕組みで学んでいく枠を作るということになります。

これももちろん、国際化の第一歩としては非常に大切なことです。ご覧いただいているように、この小さい輪の中の学生たちというのは、通常、日常4年間を学んでいく中で、非常に有機的に関係を持って4年間を過ごしていくことになります。ですから、この小さい輪の中に入っている学生たちは非常に豊かな協働作業をして4年間過ごしていくことになりますので、非常に豊かな学びがそこに展開されることになります。非常に意識の高い、その輪の外側にいる学生たちも交流をすることはありますけれども、やはり大学全体としての国際化というところの状態にはまだ届かないということになります。

でも、この大学の中に、このちっちゃい輪が、ポンポン、ポンポン、幾つもできてくる、あるいはこの小さい輪の中で学んでいく学生の人数がどんどん増えてくると、今度は大学全体にその影響が波及していくことになります。そうすると、目指すべきこの状態が訪れるのではないかと思います。

つまり、特別なものとして何かを作るのではなくて、いろいろな学び方をしていく学生が大学の中に存在し、学生が自分の学びに沿って、4年間を学んでいけるような制度、つまり4月に入ってくる学生も9月に入ってくる学生も普通にいて、卒業に必要な単位の中の、英語で例えば8割を取る学生、英語で2割を取る学生、いろいろな学生がいる中で、学生が自分の学びのスタイルに応じて4年間を過ごしていく。その中で学生たちが、自分は特別なプログラムの学生だとか留学生だというような意識ではなくて、みんなが立教大学の学生、何々学部の学生という意識で4年間を学んでいく、こういう状態を目指す必要があるのではないかというふうに思っています。【スライド④-5】

なので立教大学は、今後この最後の状態を立教大学の中で展開していく、それを目標として進めてまいりたいというふうに強く思っています。そのためには、私たちは新たに2022年度から受け入れていく新たな生徒さんを、先ほど申し上げた大学全体の国際化、活性化に結びつけるような形で受け入れて、4年間を学んでいただきたいというふうに思っています。つまり多様性を求めるところから、多様性のその先、本当の意味での学生同士のコラボレーション、それから大学として、さまざまな背景の学生を包括しながら4年間を進めていくというような状態、それを目指したいというふうに思っています。

日本語力を強化していく学びについては、後ほど丸山先生から詳しくお話があると思いますが、私からは、大学としてどう考えているかということだけ触れたいと思います。

まずは立教大学への着地、これを大切にしたいと思っています。ですので、最初の1学期目、これは所属学部の学生とも連携をした形の日本語教育プログラム、これを展開させたいと思っています。さらに1年間、寮に入らせていただくことで、またさらに、単に寮に入るだけではなくて、レジデントサポーター、寮の中での学習を展開する学生をその寮に配置して、1年間をかけて立教大学、あるいは所属学部に着地をしていただけないというプログラムを考えています。

また、所属学部に入ってから卒業までも、キャリアであったり正課外であったり、さまざまな視点から手厚くサポートし、学生同士が協働する、そういうイベント、それからつながり、それを大切に4年間を設計してまいりたいというふうに思っています。

立教大学としては、21世紀、世界中で必要とされる新たなグローバルリーダーを立教大学の4年間を通して、あるいは4.5年間を通して輩出していきたいと強く思っています。ですので、入ってきてくれた学生さんたちをしっかりと立教大学への着地を見据えて、手厚く4年間の学びを支援していけるように、これからも頑張っていきたいと思いますので、ベトナム、それからインドネシア、それからモンゴルの皆様方にも引き続き、立教大学をどうぞよろしく願いいたします。**【スライド④-6】**

私からは以上です。**【スライド④-7】**

○藤田 池田先生、ありがとうございました。

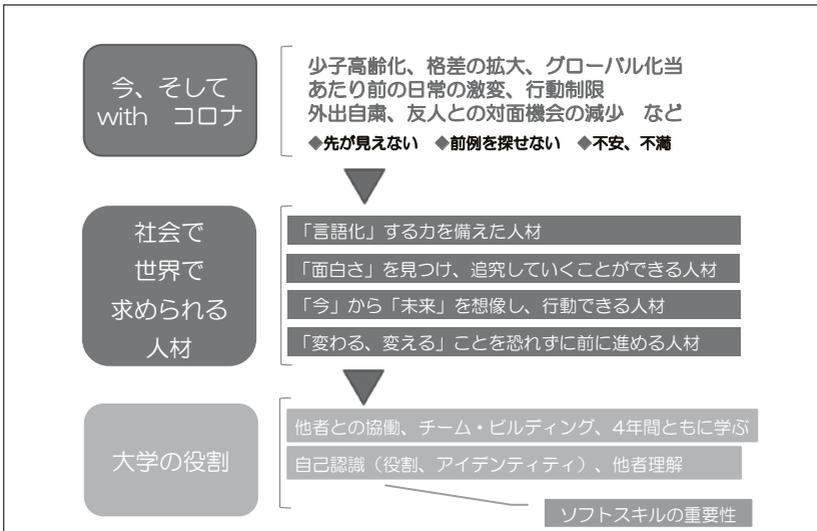
【スライド④-1】

正規学部留学生受け入れの新時代
ダイバーシティ⇒インクルージョン、コラボレーションへ



立教大学
国際化推進機構長
池田 伸子

【スライド④-2】



【スライド④-3】

21世紀の課題

1つの国だけでは解決できない。
他者との協働から「解」を導き出す必要性大。



21世紀を担う人材を国境を越えて育成！

Rikkyo Global 24, TGU

新たなグローバル・リーダーの育成

国境を越えて流動化する社会に柔軟に対応し、新しい仕組みを生み出していく変革力

豊かなコミュニケーション力で異なる文化、習慣を持つ人々とともに課題を解決する共感・協働力

地球規模の困難な課題に向き合い、問題の本質を理論的に解明する思考力

【スライド④-4】

世界中に立教の理念を共有するグローバルリーダーを！

現行の外国人入試

高い日本語能力が必要

中国（台湾、香港除く）、韓国からの学生が93%



推薦、Web活用の新入試

9月入学

渡日不要、国際標準の選抜

日本語力に偏らない選抜



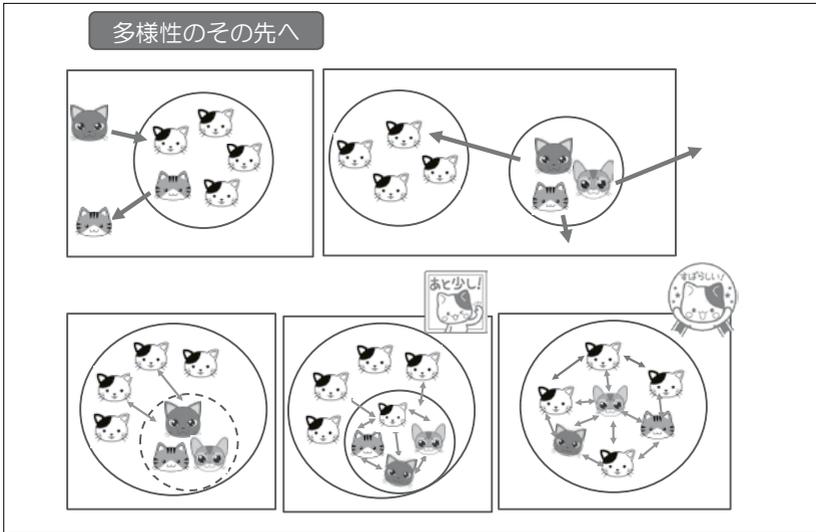
英語で学位を取得するP

日本語力強化P

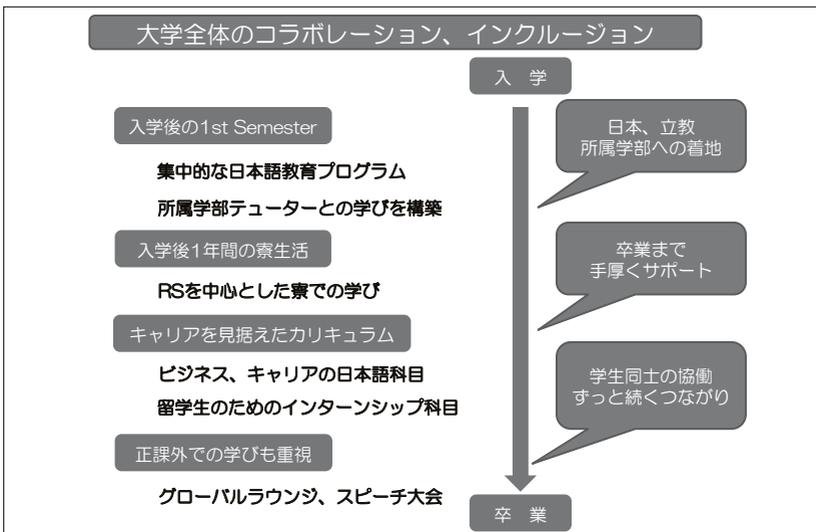
様々な地域
基礎学力の確かさ
学ぶ意識の高さ



【スライド④-5】



【スライド④-6】



【スライド④-7】

ご清聴ありがとうございました

